看護学基礎教育・精神看護学実習における生成 AI 活用を考える
―臨床指導者と教員の協働による教育実践の可能性―

○田野　将尊[1)]、佐藤　美保[2)]、茅根　寛子[3)]、渡辺　純一[3)]、小川　賀惠[2)]、浅沼　瞳[4)]
1) 医療法人埼友会　埼友草加病院、2) 杏林大学　保健学部　看護学科　看護学専攻、
3) 公益財団法人　井之頭病院、4) 昭和医科大学　保健医療学部　看護学科

近年、看護学基礎教育を取り巻く環境は大きく変化しており、オンライン授業やICT教材の活用、学習管理システム（LMS）導入など、教育DX（Digital Transformation）の推進が加速しています。こうした流れの中で、生成AI（Generative AI）の急速な普及により、看護教育の現場で生成AIをどのように位置づけ、教育に取り入れるべきかが重要な検討課題となっています。

生成AIは文章作成や要約、情報検索を支援するツールとして利便性が高く、既に10代・20代の学生の学習環境に広く浸透しています。一方、「情報の正確性が判断しにくい」「そのまま使ってよいのか迷う」といった戸惑いや不安も少なくなく、誤情報や出典の不明確さ、生成AIへの依存に伴う思考過程の希薄化などの課題も指摘されています。

これらの状況は、学生が既に生成AIと共に学ぶ時代にあることを示すと同時に、教育側がその実態を踏まえた指導や支援を行う必要性を示唆しています。特に精神看護学実習では、患者との関係構築、学生自身の感情体験の振り返り、倫理的判断など、人と人との相互作用を通した学びが中核となるため、生成AI活用には慎重な視点が求められてきました。しかし、生成AI使用の一律禁止は、デジタル世代である学生の実態と乖離する可能性があり、禁止・容認の二項対立ではなく「どのように教育の中で育成するか」を考えることが必要です。生成AIは教育DXの延長線上にある技術であり、学習を補助する有効なツールとなり得ますが、その出力内容の妥当性や信頼性が常に保証されているわけではありません。生成AIを「思考を代替する存在」ではなく「学生の思考を促進・可視化する補助的手段」として位置づけ、適切に活用するためのリテラシー育成が不可欠です。

私たちが調査した「看護に生成AIを導入した場合に生じる可能性」に関する看護学生の意見では、「情報やアセスメントの客観性」「看護の個別性」「自身の思考力や判断力の育成」など、生成AI活用に対する様々な肯定的・否定的意見が見受けられました。本ワークショップでは、これらの結果をご紹介しながら、精神看護学領域における生成AIの教育的活用の可能性、精神看護学実習において人が担うべき学びとは何かについて意見交換を行いたいと考えています。開催にあたっては倫理的配慮を十分に行い、参加者が安心して意見を述べられる「安全な対話の場」であることを共有します。発言の評価や批判を目的とせず、無断での記録や撮影を禁止し、互いの立場や経験を尊重した進行を行います。また、学生を対象とした調査結果の提示にあたっては、データは無記名で収集されており、個人や所属が特定されないよう十分に配慮した形で集計・報告を行います。なお、開示すべきCOI関係にある企業・組織および団体等はありません。

私たちはこれまで、精神看護学実習における臨床指導者と教員の協働をテーマとしたワークショップを開催してきました。本ワークショップは、精神看護学実習に携わる臨床指導者、これから実習指導を行う予定の臨床指導者、実習指導に興味のある看護師など、多くの臨床家の皆様、そして看護学基礎教育に携わる教員の皆様を対象としています。生成AIをめぐる課題を単なる技術論にとどめず、精神看護学実習における教育の本質を改めて問い直し、臨床指導者と教員の協働をさらに深化させる機会としたいと考えています。多くの皆様のご参加をお待ちしております。